

遅れを直視し

テクノロジーの進化に追いつけ

慶應義塾大学 SFC 研究所 首席所員
現代戦研究会 代表

ひだに なおあき
部谷 直亮



聞き手
むぎぞう いさお
室館 勲
(株式会社 潮流社)
代表取締役社長

政治と軍事の関係

——部谷先生には月刊カレント10月号から「軍事・安全保障」分野の連載記事のご執筆いただいております。非常に興味深く読ませていただいております。「テクノロジー」「現代戦」というキーワードで軍事・安全保障を読み解く観点、日本に必要なと感じます。本日は部谷先生の生い立ちからお伺いできますか。



部谷 直亮 氏

部谷 1984年に広島で生まれ、横浜で育ちました。幼少期はずっとテレビを見ていました。ニュースなど普通の小学生と違う番組を観ていたのか、湾岸戦争の報道が思い出に残っています。いわゆる「戦争に関する本」も小学生の当時から興味がありました。図書館に置いてある本なので、今思えば左翼が

ようね。その意味では左翼がかった思想で育つたものから、中学2年生の時に小林よしのり氏の『戦争論』を読んだときには衝撃を受けました。一気に左から右に転換し、先生に「南京大虐殺はなかったと思います！」と強く反抗する生徒に変わったので、先生も困っていましたね(笑)。

かった本が多かったですね。ただ日本軍の犯罪をオーバーに描くあまり、逆に超人的な描写になっており、それが逆説的に面白く思っていました。今でも中国の抗日ドラマで、日本兵が空を飛んだり忍者が出てきたりして、中国が「そんな無敵に描くんじゃない」と注意したという話も聞きます。私が観ていた時も、日本兵の描写は極端だったのでし

高校生の時には、学校がオシャレな校舎に建て直す計画に疑問を覚えて「説明責任を果たせ」と、生徒会副会長で地元の有力者の息子である友人と一緒に、団体を有志で作って反対運動を起していました。私たちは説明責任を果たしてほしい、イデオロギーとは無縁だと説明したのですが、逆にそうした物言いが全共闘世代の先生には左派にオルグされたと疑われしまったようです。

——随分と行動派でしたね。

部谷 しかし教師側に「推薦を取り消すぞ」と切り崩されて、最後は5人程度しか残らず、卒業という時間切れを迎えました。今では立派な新校舎が立っています。

この体験から「何かを変えるには権力は必要だな」と思いました。権力とは何なのか、権力がなければ主張は殺される、と興味が湧きました。

——権力に対する興味ですか。

部谷 大学に進むと、勉強する中で、ただ主張していてもダメだなと思いました。大学院へ進み、修士の時に初めてアメリカへ渡り、いわゆる知日派と呼ばれるアメリカ人と議論しました。日本のイラク派遣についてディスカッションをしたら、アメリカと日本で温度

指導者を兼ねなくなったんですよ。それはテクノロジの進化が要因の一つです。電信が出てきて遠くの部隊を指揮できるようになった。新聞が出てきて国民が情報を得て戦意を持つようになった。鉄道が出てきて続々と増援を送れるから、戦争が長引くようになった、という環境の変化があったわけです。そうなる、やはり政治と軍部は分かれて戦ったほうがいい、ということでは政軍関係が生まれたと言えます。

ですからテクノロジの進化で軍事が変わるといことです。テクノロジにより社会が変わり、社会が変わった結果、軍事も変わるという原則に行き着いて、面白いなと思ったのです。

——なるほど、面白いですね。

差を感じる部分もありました。アメリカ兵はイラク戦争で多くの死者を出した、一方で日本が派遣したのは護衛艦1隻と輸送艦1隻。それはアメリカからしたらがっかりするよな、という妙な納得感もありました。日本の軍事が政治に縛られていることも感じ、政と軍の関係に興味が湧きまして、修士論文のテーマとしました。博士課程でも研究して、政と軍の関係はいつ始まったんだろうなと調べたら、近代に始まったと言えるんですね。

——政と軍の関係ですか。

部谷 昔は政治と軍事が分かれています。武田信玄やナポレオン、フリードリヒ大王も、政治も軍事も戦場で処理していた時代です。それがナポレオン戦争以後くらいから分かれるようになったんですね。政治指導者が軍事

旧日本軍の反省点

部谷 博士課程以後は内閣官房傘下の団体で役員などを務め、32歳の時研究所の方に「JPress」の編集長をご紹介いただきました。連載企画案を持って行って、記事を書き始めたということが、情報発信の始まりです。——先生が研究されてきた中で、旧日本軍の反省点は多くあったと思います。少しお話を聞かせてください。

部谷 悲しいことなのですが、太平洋戦争において日本軍は「戦術」レベルでは頑張った、けれども「作戦」「戦略」との繋がりがなかったため、奮迅虚しく敗戦を喫したということです。戦争において下位から「戦術」「作戦」「戦略」という階層があって、「戦術」は



価値のために死を顧みず戦うのか」をしっかりと明確にしてあげなければいけないということです。

戦場でドンパチすることで「○○の戦い」と呼ばれるレベルです。「作戦」は戦術が重なったもので「南方全体」「ソロモン全体」のように戦域レベルの話です。「戦略」は、戦争全体の問題ですね。どうやって戦争に勝つかの話です。これらが全部結びついていないかっただけですね。戦術レベルで派手に勝った戦いもあるのに、その戦術が作戦を通じて戦略に結びついていないから、戦略目的が実現せずに単に戦力を消耗するだけだったと評せま

す。「特攻作戦」が良くない理由は様々あると思いますが、私が思うのは、その戦術が「作戦」や「戦略」レベルに影響を与えない戦術だったからです。せっかく志願してくれた貴重な人材を投じて、それが何に繋がって

テクノロジーの進化と運用

——現代戦という部分でお話をお伺いしたいと思っています。日本の軍事費を5兆円から10兆円に向けて増額していく中で、自衛隊においては憲法改正も議論されており、先生はどのようにお考えですか。

部谷 憲法で自衛隊の存在を認めてあげることとは大事だと思います。しかし、その前にやるべきことは「軍人や自衛官は、日本の何の

るかには恐ろしく曖昧だったのが実際です。

硫黄島の戦いやペリリュー島の戦いなどでも奮戦しました。しかし作戦レベルでの貢献はほとんどない。なぜなら、アメリカの対日侵攻スケジュールにほとんど影響はなかったわけですね。外交評論家として著名な、故・岡崎久彦大使も「よい戦略があれば休戦に繋がったはずなのに、ダメな戦略によって硫黄島の奮戦が、原爆投下やソ連参戦に繋がった」と評しているくらいです。

——そうなんですか。

部谷 単に手強いというだけじゃダメなんです。ちゃんとそれが終戦につながるような手強さの発揮の仕方じゃなければダメだったのです。ちゃんと戦術と作戦と戦略を結びつけないと意味がないのです。

例えば「北朝鮮に拉致被害者を奪還に行く」という作戦があったとします。この作戦は何のために成し遂げるのか？もし失敗して捕まったら、酷い拷問を受けるでしょう。総理大臣の支持率を5%上げるために行くわけではないわけです。「家族のために」と言っても、個人レベルでは死なないで家族といったほうが家族のためになるわけです。

ちなみに今、災害派遣が必要な時に「災害派遣に行ったら離婚する」と自衛官の奥さんが言ったという事例も聞いたことがあります。それは自衛官を誰でも良いからと募集するからです。「美味しいステーキが食べられるよ」という広報をして、人手が足りないから飯で釣ろうとしている。そんな公務員感覚で集まった人が災害派遣に喜んで行くのかと言うと

そうではない。昔と今は状況が違い、子どもの数が減り、就職の自由も増えているので、そういう自衛官は増えているんですよ。

ただこれは、今に始まった話ではなくて、例えば山縣有朋も同じ苦悩をしていて、西南戦争で政府軍はカリスマたる西郷隆盛を推戴する西郷軍に対して非常に苦戦しました。その翌年には近衛兵が「給料が低い」ことで反乱を起こし、山縣は「大元帥たる天皇陛下」を西郷に代わる全軍のシンボルとして持ち出すことになりました。

それくらい「何のために戦うのか」ということは無視できない。ですから軍人や自衛官は、日本の何の価値のために戦うのかをしっかりとしておかないと、ただ憲法を改正してもうまくいかないと思います。何のために戦う

を作る技術や剣術も素晴らしいのですが、技術のない素人でもライフル銃を使えば人を倒せるようになりました。そのインパクトは大きかった。

現代でも同じようなことが起きていて、熟練した兵士よりも、ドローンを使える素人のほうが強かったりするわけです。ドローンレール用のFPV（ドローンの一人称視点）で見られるVRゴーグルを使って、時速200kmでドローンを飛ばします。対戦車用爆弾を搭載したドローンが6万円程度で自作できてしまうのですから、これを活用できれば非常に強い。それこそ、今ウクライナやロシアでは中学生に軍事教練としてドローン操作を教えている状況です。熟練の兵士や数億円単位の兵器が、素人の操作する6万円のドローン

のかを明確にして、勲章・恩賞も含めた待遇改善もする。米兵と自衛官の待遇の差は大きすぎます。米軍は一兵卒でも個室なのに、自衛隊は大部屋で先輩や上官と相撲部屋のように暮らすのでは誰も入りません。憲法改正以前にやるべきことは多くあります。

——自衛官にとって職業観は本当に大事ですね。現代戦についてはいかがでしょうか。

部谷 戦争は「工業化時代」から「情報化時代」に変化しています。

これまでも、テクノロジーの進化が戦争の形を変えてきました。例えば産業革命前後。蒸気機関の発明のおかげで、鉄砲（火縄銃）がライフル銃になりました。ライフル銃は弾丸に溝を彫り、弾が回転することで真つすぐに数百mも遠くに飛ぶようになった。日本刀

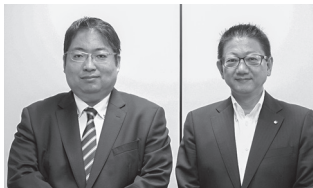
に破壊されるという状況が起きています。

——技術の進化をある程度牽引している日本にとっては、良い方向なのではないですか。

部谷 本来良いはずなんです。指導側が工業化時代で頭が止まっているので、軍事においてうまく技術を活用できない可能性があります。技術の進化とともに運用や戦術も進化することが大切です。技術が牽引するのは間違いないのですが、技術を活用に組み込むことができなければ、活かしきれません。

——これから軍事予算が増えていく中で、日本はどのように使うべきですか。

部谷 それは装備よりも「知的改革」に投資すべきです。知識や考え方の発展にもっと投資すべきだと思います。個人的には自衛隊幹部にMBAを取らせるのが良いと思うんです



ね。どんどん国内外留学させて、組織やリーダーシップ、統計学やシステム論や心理学など、社会科学の知見を積極的に取り入れるべきです。不眠の体への悪影響を知っていないと、徹夜

を美德だと勘違いしてしまう。よく日米演習でありがちなのが、最初は自衛隊が押しているけれど、皆不眠でだんだん集中力を欠いて最終的に負けてしまうという話があります。

さらにシステム論として、個別の兵器、ドローンや戦車をいかに戦闘システムに組み込むかという部分の研究が大事だと思います。アメリカから言われた兵器を買うのではなく、システムとしてどう組み込めるのかという観

点で兵器を選ぶべきです。昔の戦艦大和のよ

うに単発で開発しても、システムとして運用できなければ意味がないですよ。

——宇宙やサイバー領域といった新分野への投資はどうですか。

部谷 民生技術の登用と、若手の起用は大事だと思います。イーロンマスクは「馬に乗れない騎兵隊長はやめろ」と良いことを言いました。自分でプログラミングコードを組めない人がサイバー領域の人事評定をやっているわけです。宇宙・サイバー・AIなどがわからない上司が、人事評価で部下の敬礼の綺麗さを評価しちゃっている。ちゃんとテクノロジを活用できる若手を引き上げたほうがいいですよ。

——やはり組織においては、どの人材を引きよ

今世界の波に乗れ遅れている部分があったとしても、ぜひ希望を持って幕末から明治になった時みたいに取り組んでほしいですね。よく「日本はもうダメだ」と言う人もいますが、ちゃんと遅れているところを直視して、そこを追いつき追い越せでやっていけば未来は必ず開けます。

——本日はありがとうございました。

■ひだに・なおあき■

成蹊大学法学部政治学科卒業、拓殖大学大学院安全保障専攻修士課程（卒業）、拓殖大学大学院安全保障専攻博士課程（単位取得退学）。財団法人世界政経調査会 国際情勢研究所研究員等を経て、一般社団法人ガバナンスアーキテクト機構上席研究員、現職。専門は米国防軍関係、安全保障論。JPress、プレジデント、文春オンライン等で連載。

上げるべきかが重要ですね。

部谷 あとは現場に予算権限をあげるべきです。暗視ゴーグルなんてAmazonで買えば早いのに、競争入札にしないとダメだと。現場に権限をあげて、現場ですぐに装備をカスタマイズできる運用にしたほうが良いでしょう。兵士が自分でどんどん改造したり、3Dプリンターで銃の部品を作ったり、現場でいろいろ試行錯誤できるようにしてあげたいですね。

——若者に対して、一言お願いします。

部谷 現代と幕末の若者を比較したときに、当然幕末のほうが大変だったと思うんですよ。だって紙と木しかないところに、蒸気機関を日本で再現するって普通ムリだと思うんですが、結果できたわけです。

